

国内経済情勢

概観

金融引締めは、経済実体面にも漸次浸透をみつつある。すなわち、企業金融の面では、企業によりなお繁閑区々であるが、手元に余裕の乏しくなったものも徐々にふえつつある。商品市況は強弱区々ながら、主力商品は秋需期を迎えた割りには不ぞえ商状を呈している。

一方、生産面では、一部業種に製品在庫の累増から、生産調整をはかろうとするものもぼつぼつ見受けられるが、最終需要は高水準を持続しており、生産は増勢鈍化のうちにも依然底堅さを失っていないようである。現に、最近行なわれた各種のアンケート調査においても、企業の生産、投資態度にはなお根強いものがみられる。

この間、8月の貿易収支は、輸出の引き続き好伸を主因に大幅な改善をみたが、輸入の先行指標には底堅い動きがうかがわれる。

金融市場は引き続き繁忙、企業金融はなお繁閑区々

8月の金融市場は、月央までは7月賞与関係の源泉所得税、5月決算法人税など租税移納を中心とする財政資金の引揚げ増高を主因に、また下旬以降は銀行券の大幅増発から、通月引き締めり基調に推移した。このため、600億円に上る本行の債券買入れが行なわれたが、本行貸出は552億円の増加をみ、コール市場もひっ迫を続けた。

8月の全国銀行貸出増加額は、1,769億円と前年同月の増加額を2割方下回った。当月は例年さして目立った資金需要のない月ではあるが、本年は引締めの進行により月々繰り延べられてきた資金需要の累積に加えて、証券会社に対する特別融資など予定外のものもあったため、資金需要にはかなり根強いものがうかがわれた。このため銀行筋では、一般増加運転資金の貸出につき、一段と圧縮に努めた模様である。なお、当月の増加運転

資金需要のなかには弱電、合繊などごく一部ではあるが滞貨資金とみられるものが散見された。

この間企業の現預金の動きをみると、自動車、鉄鋼などの超一流企業や大手商社などは依然手元にかかなりの余裕を残している反面、不振業種や中堅の商社、メーカーなどでは、手元がかかなり取りくずされてきたようである。こうした状況からみると、企業金融は業況や規模により、なお繁閑区々ながら、総体としては徐々に繁忙に向かいつつあるものと思われる。

なお、企業の倒産は、6、7月と小康状態が続けたあと、8月は再び増加し、9月にはいつてからもほぼ8月並みの水準で推移している。これには、業績不振の企業の間で行なわれてきた融通手形の操作が限界に達したことなどがかなり響いているものとみられる。

商品市況は区々ながら、主力商品は秋需期の割りには不ぞえ

8月末から9月前半にかけての商品市況をみると、商品により動きは引き続き区々であり、さすが大幅に上伸し、石炭、C重油、鉄鋼線材二次製品、基礎化学薬品、木材なども強含みに推移したが、主力商品である繊維、鉄鋼の市況は秋需期入りの割りには不ぞえ商状を呈し、これまで急騰を続けた鉛、亜鉛にも高値修正の動きがみられた。

こうした商況の動きは、秋需が期待されたほどに盛り上がってこない(繊維、鉄鋼など)ことによるほか、繊維新法の施行に伴う操短緩和をいや気した先安人気(綿糸、スフ糸)ないし海外相場の落着き(亜鉛)など、当面の国内需給動向に直接関係のない要因が働いたこと、あるいは、相場がすでにかなりの水準に達したことから、いわば当然の高値訂正安(条鋼類、鉛、亜鉛)がみられたこと、などによるところも大きい。

8月の本行卸売物価は、非鉄、鉄鋼、木材の値上がりをも主因に前月比+0.1%と引き続き騰勢を示し、9月上旬も、繊維、鉄鋼は下落したものの、非鉄、木材、食料品の大幅値上がりから+0.2%

の上昇となった。

一方、消費者物価(東京)は前月比8月+0.1%、9月+0.6%とかなりの上昇となった。これは食料品が値上がりしたほか、家賃地代、自由料金の根強い騰勢によるものである。

なお、最近の労働力需給をみると、新規学卒者を除いた一般労働力市場では、鉄鋼、機械などに求人数の伸び悩みがみられるものの、新規求人が総じて新規求職を上回り、需給比率は依然引き締まり基調を続けている。また、労働省の見込みによれば、明春卒の中学生の求人倍率は約5倍と今春のそれを大幅に上回る模様である。このような状況を背景に、製造業の定期給与はここ数か月前年同月に比し12%前後の上昇を示している。

生産の実勢は引き続き高水準

8月の鉱工業生産(季節調整済み)は、速報で-1.0%の減少となった。その内容を見ると、生産財は石油、化学、繊維を中心に微増となったが、資本財は汎用機械関係が引き続き減産となったのに加え、一般用ボイラー、化学機械などで、前月増加の反動落ちがみられたため、かなり減少した。また消費財も、民生用電気機器、精密機械、自動二輪車など耐久消費財の減産から低下した。このところ、在庫圧力から、合繊、弱電などで、生産調整をはかるうとするものもぼつぼつ増加しているが、産業界には、コストの上昇や新增設備の稼働などからできる限り高い生産水準を維持したいという意欲が強く、現に、本行の主要企業の短期経済観測(8月時点調査)においても、先行き増産態度を示すものが多い。

8月の鉱工業出荷(速報、季節調整済み)は、-0.5%となった。これは、主として資本財出荷が一般機械の著減を主因に減少したためである。

8月の生産者製品在庫(速報、季節調整済み)は、+2.0%の増加となった。財別にみると、生産財が繊維、石油を中心に再び増加に転じたほか、資本財、建設資材ともかなりの増加を示した。

最近の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財の生産や出荷には、いくらか落ち着き気配がみられるものならしてみれば、設備投資の基調は引き続きゆるやかな増勢にあるものと思われる。なお先行指標である7月の機械受注(海運を

除く民需、季節調整済み)は前月著減の反動もあって、鉄鋼、繊維、窯業、紙・パルプを中心に前月比+5.7%の増加となった。

個人消費には、所得の増大を背景として引き続き根強いものがあり、これを映じて全国百貨店の売上高実勢も堅調な増加を続けている。

貿易収支は大幅に改善を示すも、輸入の先行きは底堅い動き

8月外国為替収支は総合で12百万ドルの黒字となった。これは、経常収支が輸出の好伸による貿易収支の大幅改善(100百万ドルの受超)から久方ぶりに黒字となったためである。

8月の輸出は、前年同月に比し為替で+25%(通関では+14%)と引き続き好調な伸びを示した。7~8月をならしてみても前年同月比+25%で、4~6月(+19%)よりも増勢が強まっている。商品別の動きを通関の前年同月比伸び率でみると、船舶が前月著増の反動から減少したものの、鉄鋼、自動車、合繊、繊維二次製品、魚介類が好調な伸びを続けている。なお、このところ繊維品の輸出価格は下落しているが、これは、最近の国内市況の不振が輸出圧力として一段と働きはじめたことを反映したものとみられる。

一方、先行指標をみると、8月の輸出信用状は前年同月比+21%と依然高水準ながら6、7月の伸び率に比べ鈍化しており、季節性を除いてみてもやや減少となった。

8月の輸入は、前年同月に比し為替で-1%、通関で+3%とさらに着落きを示した。通関ベースでみると、これは、主として食料が、砂糖価格の低下、小麦輸入の減少などから著減したためである。原材料輸入も繊維原料、くず鉄、木材を中心に引き続き着落きを示しているが、そうしたなかで、鉄鉱石、粘結炭、銑鉄などの鉄鋼原材料は業界の根強い生産態度を映じて依然底堅く、非鉄も国内需要のひっ迫から銅を中心に根強い基調にある。

一方、先行指標である輸入信用状は前年同月比+10%とかなりの増勢を示し、季節性を除いても徐々に水準を高めつつある。当月の信用状にはエジプト綿の一括買付けなど特殊要因が含まれてはいるが、これらを除いた実勢でもなお底堅い動きを示している。